著者略歴

木村真佐幸　（きむら　まさゆき）

1930年1月　北海道に生まれる

1955年3月　北海道大学文学部国文科卒業，同研究生，その後，北海道教育大・藤女子短大・札幌医大・明和学園札幌短大等の兼任講師を経ながら現在，札幌大学教授

主要著書論文

鷗外の歴史小説試論(一)(二)(三)（札幌大学紀要第2号3号4号）

鷗外の歴史小説試論―「意地」広告の意味するもの―（国語国文研究第50号）

北海道の風土と文学試論―北海道の交通発達史と文学との関係（札幌大学紀要第6号）

『北海道文学の周辺』（昭51・北海道新聞社）

『全集樋口一葉』注釈共著（昭54・小学館）

現住所　札幌市豊平区月寒西5条7丁目3の9

一葉文学成立の背景

昭和五一年十一月二〇日　初版　発行
昭和五四年　三　月二〇日　初版　二刷

著　者　木村真佐幸
発行者　及川　篤二
株式会社　桜楓社

101 東京都千代田区猿楽町二―八―十三
電話（〇三）二九五―八七七一

3903―760776―0723　Printed in Japan

検印省略

印刷　誠之印刷株式会社　　製本　若林製本

造本には充分注意しておりますが，落丁・乱丁などございましたら，発行所かお買上げの書店にておとりかえします。

一葉文学成立の背景

木村真佐幸著

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

第一章　後期一葉文学の一側面……7
——久佐賀義孝問題の再検討——

第二章　「大つごもり」成立の背景……45
——「後の事しりたや」一視点——

第三章　「にごりえ」一視点……67
——「お力」と「お初」の位相——

第四章　一葉文学における近代的自我……85
——「にごりえ」・「十三夜」を中心に——

第五章　「十三夜」・「わかれ道」の周辺……112

第六章「たけくらべ」成立の背景……145
——「大音寺前」転居をめぐって——
第七章「雛鶏」と「たけくらべ」の位相……180
収録論文覚書……205
あとがき……207

一葉文学成立の背景

第一章　後期一葉文学の一側面

――久佐賀義孝問題の再検討――

一

明治二十七年二月二十三日、数え年二十三歳の一葉は、初対面の観相家久佐賀義孝を訪問した。以後、記録の上では翌年の五月一日まで、何らかの形で接触を保ってきたことが推定されるのも周知の通りである。

ところで、この久佐賀との交渉が、後期一葉文学に諸々の投影があることも、既に先学の説くところである。しかし、それにしてもやはりいくつかの疑問が残る。第一に、久佐賀との交渉が一年余にわたった事実である。これは単なる経済的援助のみを期待してであろうか――。第二に、以後の作に対する投影のしかたである。たしかに、後期一葉文学は、そこに登場する人間、わけても主人公は、それをとりまく人間関係が複雑化しているし、心理の移行も決して単一的関係にとどまらず、微妙に揺らいでいる。視点を換えていうならば、一葉の作家的姿勢の発展進歩という見方も可能であろう。先学が指摘するように、「別れ道」の「吉三」が「お京」に対して、「お前のやうな人が己れの真身の姉さんだと言って出て来たら何んなに嬉しいか（中略）己れは夫れ限り往生しても喜ぶのだが……」と、姉のように慕い、さらに、「お京」が「妾」になることに対して、「お廃しよ、お廃しよ、断ってお仕舞な……」と必死に哀願するのにお京は、「吉ちゃん私は洗ひ張に倦きが来て、最うお妾でも何んでも宜い、何う

で此様な詰らないづくめだから、寧そその腐れ縮緬着物で世を過ぐさうと思ふのさ……。」等で代表される様々な〝異相〟が散見されるが、本稿は主に一葉と久佐賀との交渉経過並びに「にごりえ」の「結城朝之助」像に焦点をしぼって検討してみたい。

二

まずはじめに、久佐賀義孝との交渉の経過を、日記および書簡等から当ってみると、一葉の日記は、明治二十七年二月三日から十六日まで欠け、十七日・十八日・十九日・二十日と復活しているがわずか一行足らず、主に小説「花ごもり」の執筆の経過が記されているのみで、二十一日は全く欠け、そして二十二日、たった一言、「かみあらひ」のみ――、ところが二十三日、つまり久佐賀訪問当日は、久佐賀との面談内容を中心に三九〇〇字に及ぶ膨大なものであり、これは訪問以前の空白を一気呵成に補塡するかの感を抱かしめるものである。したがって、この一事を考えても、一葉にとって久佐賀訪問がいかに重大な意味を持つものであったかを想像するに吝ではない。

ところで一葉の久佐賀訪問の意図は一体何か――。たしかに当日の日記には、「久佐賀はまさご丁に居して、天啓頭真術をもて世に高名なる人なり。うきよに捨てもの〻一身を、何処の流にか投げこむべき。学あり、力あり、金力ある人によりて、おもしろく、をかしく、さわやかに、いさましく世のあら波をこぎ渡らんとて、もとより見も知らざる人の、ちかづきにとて引合せする人もなければ、我れよりこれを訪はんとて也」と、悲壮な決意のもとに、己れが心を鼓舞しての訪問と成ったものであり、和田芳恵氏の説くように、「一葉は一攫千金を夢みて相場をやろうとして、秋月の偽名を用いて久佐賀に面会を求めた」（「一葉の日記」）のであって、その示唆を与えたのは西村鋤之助である旨の指摘も貴重である。すなわち当日の日記にも、「すでに浮世に望みは絶えぬ。此身ありて何か

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はせん。いとをしとをしむは親の為のみ。さらば一身をいけにゑにして、運を一時のあやふきにかけ、相場といふことを為して見ばや……」と述べていることからも一部符合するが、一方、塩田良平氏の指摘のように、「もし、釧之助が直接久佐賀を知ってゐれば、一葉は秋月と偽名しないでもすんだ」わけで、「彼女が当時の新聞乃至釧之助などの口から、久佐賀の名を聞き覚えてゐて、ひそかに運だめしに訪れたのではないか、……」（「樋口一葉研究」）という疑問と推定は私もそれなりに示唆をうけるとしても、やはり、何か釈然としないものが残るのを否定できない。

久佐賀訪問の意図するものは、広い意味では経済的援助ということには間然とするところはさらにないが、具体的な問題ではこれをどのように理解すべきであろうか。明治二十七年三月十三日の一葉の日記に、「真砂丁に久佐賀を訪ふ」とあり、その翌日と推定される手紙に、「きのふ仰せられける御詞の偽りならずば御馴染もいまだ浅きに不遠慮の申条ながら私成業の暁までふみ行道を助け給はらずや……」と、歌道――つまり歌門を開き独立したい、という具体的な意図を示しているが、一葉の本心はやはり小説、しかも大作を書きたいというのが本心であったのではなかろうか――。とはいうものの、久佐賀後援の目的を、小説云々では、当時の情況から考えても、まず不可能であり、ましてうら若い女性の身であってみれば、まず常識の限界外というべきもの、したがって表面は歌門を、内実には小説執筆に専念する――、そうでなければ、後で触れるように、久佐賀との交渉が、あのように煮え切らない態度にはならなかったと思うのだが――。歌門のスポンサーは師の歌子の例もあり、直ちに具体化し、拒諾にはあのように長い期間を必要としなかったのではあるまいか。とにかく一葉は、「わがかばねは野外にすてられて、やせ犬のゑじきに成らんを期す」（明治二十七年三月）の「捨て身」の戦法で可能なものはなんでも当ろう、と考えた時期もあったかも知れないが、しかし、それはたぶんに日記の中に投影された己れが身へ、鞭打つことばでもあったとも解されよう。現実の一葉――つまり久佐賀の手紙等から推定される一葉は、久佐賀の心理を先々まで読み、まさに久

佐賀を〝翻弄〟するほどの客観的視座さえ有している。もっとも、「窮鳥ふところに入りたる時は、かり人もとらず……」云々の一葉のことばのように、追いつめられた人間が、逆に〝冷静〟になる……という見方も考えられないこともないが、しかし、久佐賀との交渉の経過をみると、必ずしもそのことばが的中しているとも思われない。

いま一つの点、「成業の暁云々」は、いわゆる「出世ばらい」の意味と考えることができるのではなかろうか――。そして、この事の示唆は、「文学界」の連中とみることは必ずしも不思議ではない。一葉が大音寺前転居を決意した諸々の要因の中に、「人つねの産なければ、常のこゝろなし。手をふところにして、月花にあくがれぬとも、塩噌なくして、天寿を終らるべきものならず、かつや文学は糊口の為になすべき物ならず、おもひの馳するまゝ、こゝろの趣くまゝにこそ筆を取らめ……」（明治二十六年七月）といった、芸術至上主義的な発想は、やはり「文学界」の連中の影響がその一要因になっていることも否定できないと思われる。

以上の諸点を、さらに明確化するために、久佐賀との交渉経過を順を追って当ってみることにする。

三

まず、はじめに、久佐賀義孝なる人物について若干考察したい。いま、「京浜実業家名鑑」[2]（明治四十年十二月廿日発行）によると久佐賀は元治元年、熊本の「家素と地方の豪族」の家に生れ、幼少にして郷里の「杉本禅師」について禅を学び、傍ら漢学を修め、その天資頴悟は「一を聞いて十を知る」ほど、やがて「藤井禅師の門」に転じ、研鑽三星霜、また同郷の「上林師」の紹介で、長崎へ赴き清人「張子房」について支那語を学ぶ。十九歳の時、笈を負って豊後に至り、名僧「五岳」に師事、さらに余力をもって、「易経」を収め、五岳師の補助で、「人類に関する季節学研究」の為、朝鮮に渡って、「大院君」の寵遇をうけ、「大学士」の称号を得る。その後、支那を経て印度、

米国を歴訪、至るところ、「名山」に登り、「大沢」を渉し、「気候を験」し、時には断食をもって「一身を学術研究に委すること多年……」、明治十九年帰朝して、東京本郷区て「顕真術会」を創設、また「予言に妙」で、「人身の吉凶諸相場の高低一として適中せざるはなし、世人以て神となす……」云々。その後、明治三十四年十二月、推されて「大日本陰陽会の会長」さらに政界、実業界に入って、「公私各般の業務に関係する所枚挙に逞あらず……」とあり、この文面にあらわれた久佐賀は、まさに〝完璧〟な人格者そのもの――。しかし、一葉との交渉過程から判断できる久佐賀は、いささかこれとは一致し難い――というより、むしろ以上の形容にはおよそ程遠い感を抱かしめるのである。もっとも、森銑三の「明治東京逸聞史」の中に、「紳士の下落」と題して、次のような文が掲載されている。「『日本紳士録』が交詢社から出た。これを見ると、今まで一向に尊名を聞かなかった紳士が沢山にましますことが知られる。これらの紳士方は、定めし満足してお出になることだろう。」「東京政経雑誌＝雑録」（明治二十五年一月九日）とありさらに、「日本紳士録」と表題して、『日本紳士録』の一書が出版せられたところ、その中に、いかがわしい人物がかなり載っているという投書があり、日本新聞の『諷叢』欄にそのことを取り上げて、「申」のような人々を含めているから、紳士でなく伸士だ、録も碌とした方がふさわしい」（「日本新聞」明治二十五年一月十三日）などの記録がみられる。なお同じく、日本新聞の明治二十五年一月二十六日付の「寄書」の欄にも、「紳士々々世間何ぞ紳士の多きや近日出版の日本紳士録を見るに、腰弁官吏に紳士あり、縁日商人に紳士あり、（中略）中には是迄余り世間に顕はざる顔振あり、之れを隠紳士と申すべきものか―略―紳士と申すものは如何なるものを云ふや、ツイデに紳士の定義も承りたし。」等々のアイロニカルなものも散見されるが、もう一つ、同年一月二十四日の「時事新報」の「日本紳士録＝再版」と題する記事の中に、「印刷鮮明にして、紙数千頁の上に渉れども、価は僅か八十銭の由、近頃便利の書物と云ふべし。」などから、当時の紳士録がたぶんに営業的、宣伝的意図があった

と解することもできよう。したがって、塩田良平氏が「樋口一葉研究」で指摘のように、既に述べた「久佐賀紹介文」も、必ずしも額面通り受けとるわけにはいかないと見て差しつかえなかろう。

四

筑摩の一葉全集第六巻にある手紙文「五十六」――すなわち一葉が久佐賀に宛てたものの下書と推定されるものによれば、「此ほど御高論有がたくいさゝかうき雲のはれたる様に御座候さりながら解脱しがたきこゝろの迷ひはかくていよ〳〵うたがわしき処も御座候てもとより不敏の身の天の道理をしるによしなければかくて此のまゝまどひの内に酔をなし酔のうちに夢をなし世をぬば玉のやみの中に送らんかとも存じ候へども天地日月を御むねにやどし給ふ先生の御高説をも承りは申ながら知らざるを知らずとしてやみぬべきにあらずと存じ文にあやなく意の通じがたきをもかへり見ず御こと多くして我々如くけしの実のはかなごとに御耳目のとどまるべきならぬをもはゞからず貴覧をわづらはせ候次第に御座候……」と、過日訪問（二十三日のことであろう）の詫びと謝辞を丁寧にのべた上、久佐賀の社交上の美辞麗句の内実を一応は知悉しながらも、そのことばを盾にとって重畳的にせめていく筆致が、まず印象的である。つまり一葉は初対面の段階で久佐賀なる人物を見抜いたのではあるまいか――。一葉はさらにつづけて、「御高説によれば人々生れながらにして得たる処ありさらぬ処あり士農工商みち〳〵によりて長短相たすけ一国一世をかたちづくるものゝ様に承知され候されば其人人の福禄おなじからず大あり小あり強弱あり……」と、秀吉家康の福禄と西行芭蕉の福禄は自ら同様ではないと両者を比較し、ついで己れの身にこれを照射してたたみかけていくあたりは見事というよりほかにない。すなわち、「これを我が上につきては我が生れ性の大小をかんがへ合せ候はゞ、いさゝか天に恨のなき能はざる様に候まゝ此ほど仰せ聞けられ候には望みを大にすべからず破る

ゝうれひあり蔵むるかたちにして発する質なければ静かにかき籠りて安心立命を求むるぞよけれとの趣か、その望みを大にすべからずとも世にむかひて花々敷はたらきを為すべからずの御意味か、もしくは山水にかゝわ(ママ)りて人にはつゝむ名のおのづから千載の後もなどおよばぬ望みをもおろかなる心に抱くべからずとの御詞か……」と、ここでも久佐賀のことばを三つに分類して、結局「此あたり命じがたく日々苦しみもだへ(ママ)居候」と、自分でも判断ができず苦しんでいる旨を訴え、久佐賀にその結論を迫っているのが目につくし、さらに一葉はこれにたたみかけるように、「にごりにごれる世の中をいとひて清き一生を送らんとする身に災厄しばしば来り危難度々のぞみて人しらぬ苦しみにこゝろを痛めつゝ猶此よを捨てもはてぬは或る一つの大きなる望みにつながるればに御座候を我天性の小さくかすかに小溝の中に育ちて汚れのうちに死するうちむ(ママ)しと同じかるべしとはさても情なき生れに御座候はずや天は無意にして万物を生じ愛憎好悪なくおの〳〵処を得せしむるものと存じ候に御詞によれば我が運命の如き殆ど天はゐこあるをうたがはるゝ様に御座候いつしか御あかしいたゞきつる四季活用の御物がたりは一々敬服申居候へども一時一ときの出来ごとはさても有ぬべし一代の運命に迷ひの御坐候を誰にか又御訴へ申出べきとておろかなるむねに抱きつるおもひはそのよし不敬の段は幾重にも御ゆるし願上候――」。「追白」として、「先月申上候通り貧者その日にも事をかきよの人めかしき御礼もなし難きをさるかたに御ゆるし下さるべく候――　久佐賀先生　御前　夏子」とある。

以上、ためらいもなく、ながながと引用したが、この手紙文は、久佐賀訪問直後のものと推定されるだけに、以後の久佐賀に対する一つの姿勢とも考えられるからである。つまり、この手紙は〝字面〟こそ慇懃そのもの――、しかし、よくよくみると久佐賀に教示を仰いでいるようにみせながら、その実は有無を言わせぬ強引さがかくされている。初対面の折、久佐賀は一葉に対して、「君がすぐれたる処をあげたらば、才あり、智あり、物に巧みあり。

悟道の方にもゐにしあり。をしむ処は、望みの大にすぎてやぶるゝかたち見ゆ。福禄十分なれども、金銭の福ならで、天禀うけ得たる一種の福なれば、これに寄りて事はなすべきにぞ。商ひと聞だに君には不用なるを、ましてや売買相場のかちまけをあらそふが如きは、さえぎって止め申べし。あらゆる望みを胸中よりさりて、終生の願ひを安心立命にかけたるぞよき……」の言質をとっての攻撃ぶり――、〝天下の久佐賀〟の名にかけても何らかの形で、援助の手をさしのべなければならないような誘い方――まさしくイニシアチブは一葉の手中にあるといっても過言ではあるまい。しかも一葉は、「追白」とわざわざ行をかえ、「貧者その日にも事をかき……云々」と、最後の「詰め」を忘れぬその〝完璧〟さには驚嘆のほかはない。

五

案にたがわず久佐賀は、一葉の〝誘導尋問〟に答えてきた。

「過日態々被為入候処何之風情も無之遺憾千万に存候而れ共余が無学の拙説貴嬢の心燈に聊か移りたらんには余の幸栄(ママ)に候次に余は貴嬢の精神の凡ならざるに感ぜり爾来願くば親しく御交際玉はらば余の本望に存候……」と、久佐賀が一葉に対して大いに関心を示し、しかも積極的に近づく態度がよみとられる。特にこのことは、次に紹介する「梅見の誘い」によっても一そう明確化すると思う。「近頃は臥龍梅園実に盛りにて春気の初めの人間の心正さに陽開の時季凡そ人も心の花となりてこそ草木の花を見ざれば花を見るの楽あらんや而るに今季正さに天地の媒介にて此の梅園に人を誘ひ花を楽むるの時に際せり幸ひ貴嬢にして寸閑あらば該園に同伴せんと欲す貴嬢如何にや若し同意あれば適日を期し返章を玉はらんことを　義孝」――。樋口悦「一葉に与へた手紙」の注によると、「日附はないが、明治二十七年二月二十八日の日記」から判断されるとある。たしかに当日の日記には、「早朝、久佐賀

より書あり、君が精神の凡ならざるに感ぜり。爾来したしく交はらせ給はゞ余が本望なるべしなどあり。頃日、臥龍梅満開の時なるに、いかで同行して……」とあるし、手紙文とその内容も一致するので、この日付は間違いない。

ところで、久佐賀のこのような態度に対して、一葉はどのような反応を示したであろうか――。久佐賀の手紙に添付された次のような歌を含めて、後述するような厳しい批評をもってしている。「君がふたたび来たさせ玉ふをまちかねてとて歌あり」として、「とふ人やあるとこゝろにたのしみてそゞろうれしき秋の夕暮」――。一葉は、「歌もよからず、手もよく書きたりとは見えねども、才をもて一世をおほはんの人なるべし。梅見の同行はかれに趣向あるべし。我れは彼が手中に入るべからずとほゝ笑みて返事したたむ……」、久佐賀の歌、筆の稚拙を批判し、「かれに趣向あるべし……」と、その奥底まで見透し、その手にはのるものか……とばかり内心「笑み」すら浮かべる〝余裕〟というより〝不敵さ〟さえ思わせる。

ところで、一葉は、どのような返事を認めたのであろうか――。「御ひえ〳〵敷相成申候。御書拝読此ほどは(ママ)をしかけの参上に失礼の御とがめもなく御高説仰せきけられ日夜こゝろにくりかへし居申候うきよにたよる方なくして塵塚のすみにうごめき居りし身を捨て玉はぬ斗りか御ねんごろの御文の様、ことに梅見の御さそひまで仰せ下されけんは、御こゝろのほどうれしく存じまゐらせ候――」と、内心の批判的なものとはうってかわっての社交表現――ことに梅見の誘いに対しては、「貧者余裕なくして閑雅の天地に自然の趣きをさぐるによしなく、御心はあまたゝび拝しながら御供の列に加はり難きをさる方に御見ゆるし下さるべく候よしや袂にあまる梅がかはここに縁なくとも御厚意のほどを月とも花とも味ひ可申御詞にあまへ不日御ひざもとにまかり出づべく候まゝ御見すてなく願上まゐらせ候。先は御返事のみ　かしこ」……とあり、「ありし御詠の御かへしとはなけれど」として、「すみよしのまつは誠かわすれ草つむ人多きあはれうきよに」……以上がその返事の全文である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com